

狐野 秀存



1948年 石川県に生まれる。1975年より大谷専修学院指導補となる。1998年より竹中智秀前学院長のもと、指導主事を歴任、30数年の長きにわたり学院に身を捧げる。2007年1月学院長に就任、現在に至る。 金沢教区仁随寺衆徒。

「人を意識するようになって、自分を意識するようになるんです。」

この人に聞く

人は、必ず他者との関わりを通じて成長します。誰と、どのように、どれだけの深さで関わり出合いを重ねていったか、その人の人間性となって表れます。中学、高校の部活であったり、何気ない学校の行事の「コマ」であったり、忘れられない思い出は誰にでもあるでしょう。一方、その人の人間性を問題にしない方法も世の中にはあります。進学塾、通り過ぎるだけの人間関係、サーブिस、インターネットやメールなど媒体を介しての関係。なら、仏教を学ぶということは人間の成長と別でしょうか？同じでしょうか？

今号では、京都にある全寮制の仏教教育の現場「大谷専修学院」の学院長をしてあられる狐野秀存先生に、かつての卒院生石神真さんから改めて学びの意味についてインタビューしてもらいました。



●慶長10年(1605)10月教如より土手組に贈られた品々

本尊(大慈尊像) [安八町森部 光願寺蔵]

教如肖像 [安八町森部 光願寺蔵]

散らさじと森部の里に埋めばや かけはむかしのままの江の月

教如書状(御墨付) [報徳会所有] 書を添えた際の厚紙を写れない天志尊像を贈る望みがあれば何でも茶屋の松井に申し出よ等が書かれています。



教如辞世の句「安八町森部 光願寺蔵」

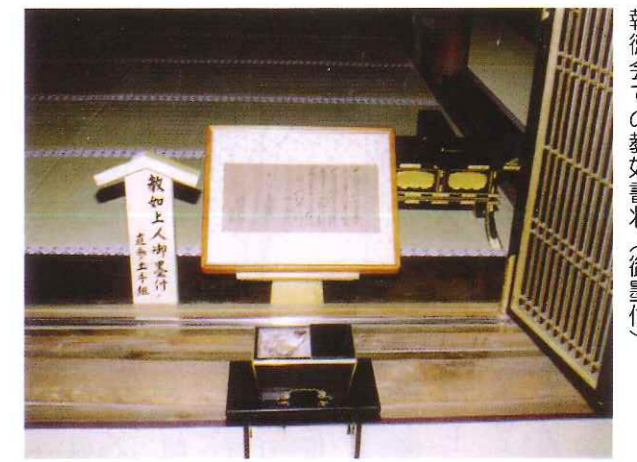


平成十九年十月十日 上組西来寺での十日講

毎月会所が変わっても十日講を支えるご門徒の参詣があることに感心しました。「昔は本山まで数十人でお米を届けて、ご門首夫妻との対面を喜んだものだ」と活動が地域に限定され、歴史に埋もれゆく様を寂しがっておられました。土手組が信仰の共同体であるという原点を僧俗共に確かめていく営みが必要になるのだろうと感じました。



報徳会の籠 教如上人からの東本願寺直参の御墨付や寿像がはいっており、持ちまわりの寺に運ばれます。



報徳会での教如書状(御墨付)

編集後記

ご門徒さんからゆべし(柚餅子)をいただいた。久しぶりのゆべし。柚の香りとなつかしい味。中国から渡ってきたと言われる柚は、今では身近なもの。昔、母が干し柿に入れて巻き、お菓子を作ってくれた。でも、いつの間にかそのお菓子をみることも無くなってしまうた... ゆべしを食べながら、先人の文化を受け継ぐことも受け継いだものを子に渡すことを、忘れかけていることに気が付いた。しかし今、この味、子ども達に分かるかな????



摩耶

〈資料提供〉
ハートピア安八 歴史民俗資料館

発行 岐阜教区教化委員会
真宗大谷派岐阜教務所
磯野恵昭
〒500-8054
岐阜市大門町1
Tel.058)266-1378
編集 岐阜同朋編集委員会

この人に聞く



この人の名前
狐野 秀存
しゅうぞん

●大谷専修学院とは？

石神 私は京都の大谷専修学院の本科と別科で二年間仏教を学んだんですが、一体大谷専修学院というのはどのような場所なんですか？

狐野 大谷専修学院の学院長をしてもらった信國淳先生が学院の機関紙「願生」の座談会の中で、

「なんといつても仏法は我々の自他共同の生活基盤の底からきかねばならぬ」と言ってみえます。

つまり、共同生活の場所で仏法という

ものが身に響いてくるものなんだと。これが学院の原点なんだと思います。そして信國先生の後を受けた竹中智秀前学院長がおっしゃられていた四つの学習があります。一番最初に知識学習。学校です。知識学習をします。二番目にそれが自覚学習に展開する。つまり学んだことが自分自身の問題とならなければならぬ。そしてそれが生活学習となっていくのです。学んだことが自分の生活の上に証しされていくというものがなければ、学んだことにならないでしょう。最後にサンガ学習ということをおっしゃられた。

(※サンガとはサンスクリット語で共に

仏道を学ぶ仲間を意味する言葉です。)

石神 共に聞いていく仲間というあり方を学ぶ場ということですね。

狐野 そうです。それで夏目漱石の話を紹介しておきます。「私の個人主義」という本が文庫本になっているんですが、はりきって留学した漱石が、当時世界の首都ともいえるロンドンで、いかに自分のこれまでに学んできた価値がうすつべらな借物の知識であったかと思ひ知らされるんですね。精神的に漱石はまいってしまっている。そういう中で漱石が自分自身の歩みをふりかえって、

「自分の鶴嘴で苦勞して鉋脈を掘り当てなければならぬ」と言っています。

漱石の言葉を借りていうならば、専修学院というのは鶴嘴を教える場所です。仏教はこうですよ、人生はこうですよ、という宝を与えるのではなく、鉋脈を掘り当てる鶴嘴を与える場所だと。

●ブラザーシステム

石神 専修学院の方針にブラザーシステムというものがありませんが、これはどんな考え方から取り入れられているんですか？

狐野 これも「願生」で信國先生が語っておられます。学院長として先生が赴任してびっくりしたのは、みんなの顔が暗いんだと。これが仏教を学ぶ青年の姿かということに愕然としたんだと。それで新しい試みとして導入したのが食堂を開設すること。みんなで一緒に食事をいただく。そして次に寮。若い指導の職員の人たちと一緒に生活をします。職員、学生と、一応の区別はあっても、職員学生ともに教えを学ぶものだ。その一点においては全く平等だという、そのことを主に寮とか、食堂とか、生活の形のうえで表現してい



インタビュー
石神 真氏
1970年生まれ
1989年 大谷専修学院卒(本科)
1990年 別科卒
岐阜教区第15組 願運寺衆徒

●テレビ携帯禁止!?

石神 専修学院ではテレビや携帯電話など禁止していただきますが何故ですか？

狐野 さつき生活学習ということをやったけれども、人と人が顔を合わせて、そして話をします。二十四時間、仏法の話をしていくわけではなく、言葉で、言葉を交わす、顔を合わせて話をします。これが仏法に限らず、人間関係ということが一番基本になつてくると思う。結

くのがブラザーシステムということですね。

石神 自分も学院に入って安心したのはそこなんです。大人にも学びの姿勢としてウソがなかった。でも、一緒に先生も学ぶんだということが徹底しているのは、専修学院だけなんじゃないか？

狐野 そんなことはない。僕が学生の時に一番感動したのは、たまたま誘われて京都市内の相応学舎に行ったときに、当時学院に講師で来ておられた寺川俊昭先生や、仲野良俊先生が一番前の机に並んで座られていて、安田理深先生の講義をカリカリカリと筆記しておられる。僕は安田先生の話なんかぜんぜん覚えてないけれども、先生たちが学んでおられるという光景を目の当りにして、諦めずに学びを続けることができたと思うんだ。そういう精神というのが学院に受け継がれているということだと思ふよ。

狐野 そう。人を意識するようになって自分を意識するようになるんです。みんな自分というものは、当たり前、言われなくてもそこにあると思つていけるけれども、たまねぎの皮を剥くようなもので、からっぽなんです。

●何が問題なのか？

狐野 僧侶であるとか、教えであるとかという前に、人と人の間をつなぐものとして一体何が問題なのか。僕に言わせると、それは教化者意識なんだと。このことが、全てを暗くしてる。

予め自分を一つの何かポジションとかポストに想定しちゃつてそこからモノを言つてしまう。現実に、生きてるこの身というのは、私もあなたも子どもたちも同じ人間として生きてるわけだから、そこには全く何の区別もない。そういう中でもし経験があるんであれば、自分の経験を伝えたいし、誰かがつらい気持ちでいるなら、どうしたんかと聞いてやればいい。そういうことでしょうか。住職だから、何か教える者、あなたは教えられる人、そういうことが最も非仏教的なことなんじゃないですか。

石神 衣を着ていると、どうしてもそういう風になつてしまう。どうしても、自分が教化者であるような気がしないでもないんですけど。

狐野 しなければならぬことは当然ある。衣を着ている以上は、儀式を執行し、教法を宣布する。ただ問題は私自身が教えられる初めて成り立つものでしょう。お釈迦さまの教えを聞くんだ。正信偈なら親鸞聖人の教えを聞くんだ。それを今儀式として行っているんだと。そこが抜けてしまえば、それは猿芝居にしかならないでしょう。精一杯言えたい。精一杯儀式として勤めればいい。私が言っていることは教えられることなんです。このように聞いた。ぼくは感動したんだと、だから言ってますよ。



童子に、自分自身の体得している境地（所得の法門）を説き教えます。そして、次の善知識を訪ねるように指示します。「入法界品」は、このような善財童子の求道の旅を内容としています。

日本全国の寺院には、善財童子を題材にした絵画や彫刻が多く残されています。今の場合、彫刻された善財童子像の中で、この写真と符合する童子像を探さなければなりません。多くの仏教彫刻の目録や写真を調べていくうちに、次第に明らかになったことは、善財童子像に限っては、この童子像のみが単独で安置されることはないということです。

つまり、文殊菩薩像の脇侍の一人として善財童子像が組み込まれているのです。これを「文殊五尊像」とか「文殊菩薩騎獅像」の形式というのですが、獅子の上に文殊菩薩が乗った像を本尊として、脇侍の中の一人として善財童子像があるというものです。このような形式の文殊五尊像は、中国の山西省にある五台山の文殊信仰と深く関わって出来上がったもののようなのです。それが日本にも伝えられて、多くの文殊五尊像が造られるようになったのです。

少し遠回りをしましたが、結局、東京国立博物館が開設しているホームページを見ることで、きつかけが見つかったのです。私が探していた、あの写真の善財童子像は、現在、東京国立博物館に所蔵されている「文殊五尊像」（鎌倉時代、重要文化財）の中の「善財童子像」であることが判明しました。後になつて知ったことですが、その善財童子像は、『日本の美術314 文殊菩薩像』（至文堂刊）の中でも、詳しく紹介されています。『華嚴経』『入法界品』の中では、善財童子は、第一番目の善知識として文殊菩薩と出会い、後に文殊と再会します。そのような文殊と善財との深い師弟関係が、仏像の形式にまで採り入れられていることを、今回、あたためて学ぶことができたのです。



一色 順心(いつしきじゅんしん)

1950年 岐阜県岐阜市生まれ
 1973年 大谷大学文学部仏教学科卒業
 1980年 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
 同年より 大谷大学文学部助手に就任
 1991年 真宗大谷派上宮寺住職就任(現在に至る)
 1992年 NHK文化センター岐阜支社講師就任(現在に至る)
 現在、大谷大学短期大学部教授

◆ 出版物

一色順心編『唐復礼撰十門弁惑論注解』平楽寺書店(2006年)
 『入法界品』における慈悲と善知識(『日本仏教学会年報』第72号、2007年)



一枚の「善財童子像」の写真をめぐる

一色 順心

(大谷大学短期大学部教授)

半年ほど前のこと、ある人から、一枚の白黒写真を見せられました。そこには、髪を左右に丸く結い、顔を右上に向けて合掌する童子の姿が写っていました。その人は、石川県でこの写真を入手したそうで、あなたには、この写真に心当たりはないかというのです。しかもこの童子像が、日本のどこかにあると

すれば、どこの寺院に所蔵されているのか突き止めてほしいということでした。

じつは、私も、この童子像の写真を見かけたことがあります。四十年ほど前のことであつたでしょうか、同朋会運動が全国的に広がりを見せ始めていた頃のことです。岐阜の自坊で開かれた開法会の席上、これと同一の写真が何枚も配られたことがあります。念仏の教えを共に学ぼうとして集まっていた人々も、あまりにもひたむきで、うるおいのある童子の姿に魅せられたのでしよう。多くの人々が、この写真をお持ち帰りになりました。それが、現在に至っても、あるご門徒宅の仏間には、この童子像の写真が飾られているところもあります。そして、この写真のモデルとなっているのは、善財童子であるとのことでした。

善財童子とは、『華嚴経』『入法界品』に登場して五十五人も善知識(善き師、善き友)を次々と歴訪する求道青年のことです。経典の中で、善財童子は、「私はこの上ないさとりを求める心をおこしましたが、いまだ、菩薩の修行とはどのようなものであり、菩薩の道をどのように歩むべきなのかわかりません。どうぞ、善知識よ、教えて下さい。」と問います。それに対して、善知識は、

門徒の系譜

土

手

組

岐阜教区第10組11組
岐阜市・大垣市墨俣町・安八町

教如上人を守った土手組

この美濃地方にどのように
真宗の教えが広まっていったのか。
歴史を紐解くと
門徒の息吹が聞こえてきます。
今号では長良川を挟んで広がる
水郷地帯。
土手組を紹介します。

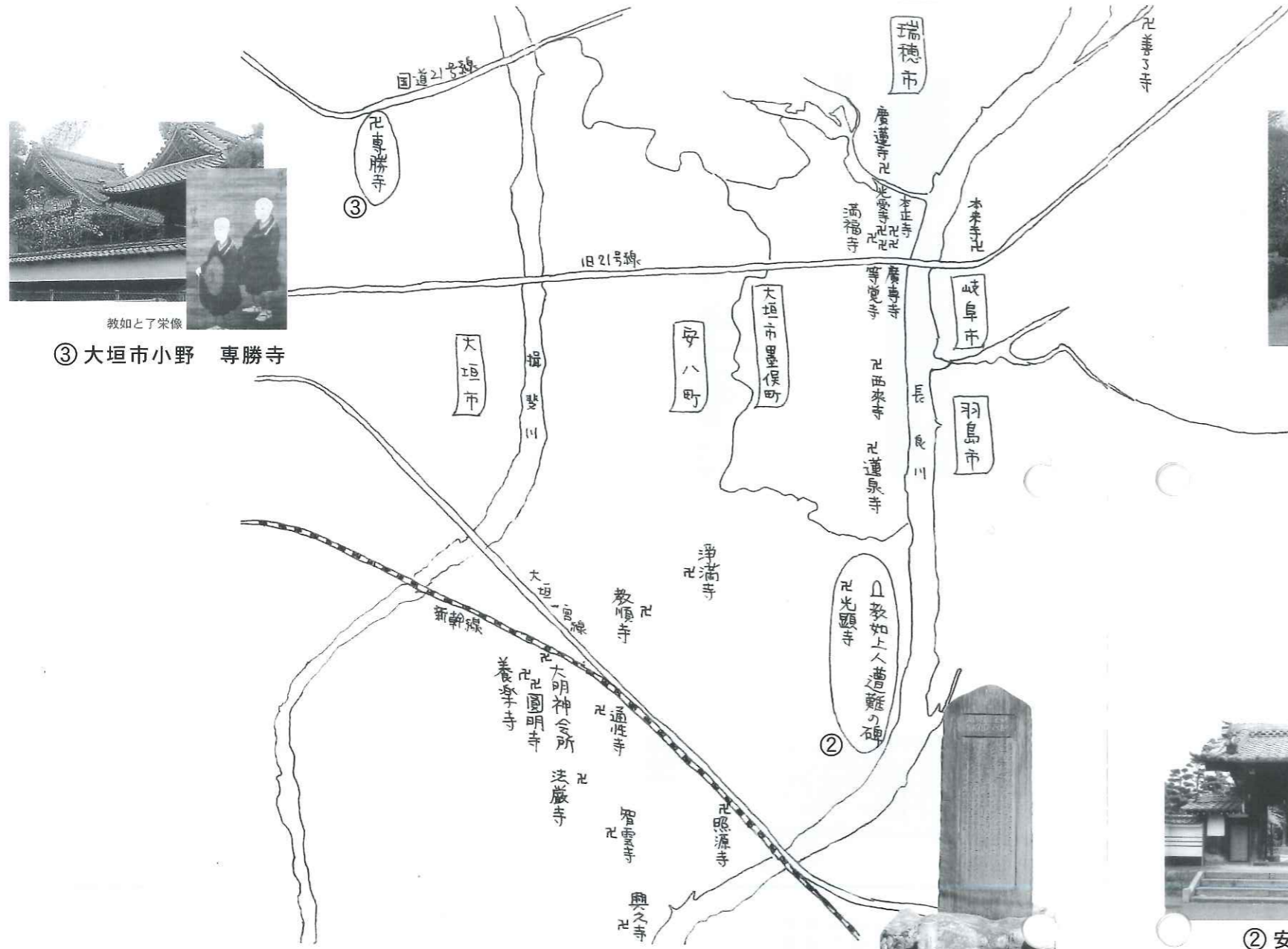
村名	安八郡森部村	大森村	南條村	大野村	善光村	下宿村	上宿村	墨俣村	中須村	大明神村	水取村	南今ヶ淵村	北今ヶ淵村	本果郡祖父江村	厚見郡日置江村	茶屋新田
合計	17人	5人	1人	2人	4人	7人	10人	2人	2人	2人	7人	5人	5人	3人	6人	83人
守護した代表者数	5人	1人	1人	1人	1人	1人	1人	2人	1人	1人	2人	1人	1人	1人	1人	19人
戦死者	源治、浅右衛門、元右衛門、友八、茂市、彦三郎	孫左衛門	彦造	与右衛門	半右衛門	喜三郎、清平	又右衛門	嘉平治、忠右衛門、友右衛門、幸右衛門、孫作	半左右衛門							
氏名																



① 羽島市足近町 西方寺



② 安八町森部 光顕寺



③ 大垣市小野 専勝寺

織田信長との十年戦争で石山本願寺を焼かれた本願寺教団は、豊臣秀吉より京都堀川に寺地を得て再興の道が開かれました。その秀吉が亡くなり、天下の雲行きが怪しくなった慶長五年（一六〇〇年）のことです。
七月二日に京都を出立し、上杉征伐のため関東出陣中の徳川家康を下野国（栃木県）小山に訪問した教如上人は、折りしも関ヶ原の合戦が今に火蓋を切ろうとする美濃路を帰洛の途につきます。西方寺（現羽島市足近町）を出て、安八郡森部の光顕寺に入った教如上人ですが、西軍石田方の軍勢数十人の襲撃を受けることとなります。東軍の情報京に伝える嫌疑がかけられていたものと思われまます。上人は本堂の須弥壇の下に隠れて、もはやこれまでと辞世の句を須弥壇の引き戸の板に、短刀の先で刻んだということです。

散らさじと 森部の里に 埋めばや
かげはむかしの ままの江の月

「散りたくなくとも森部の里に我が身を埋めることになりましょうか、長良川に映る月の影は昔のままではあるけれども」

上人の従者や渋谷祐慶が奮戦する中、上人の危難を聞きつけて近郷の僧や村人が手に鍬や鋤を持ち集まってきました。集まってきた門徒の多さと気迫に押され、石田方は一旦退却を余儀なくされます。

その後上人は、集まった門徒の警護の下、小野（現大垣市）の専勝寺を経由し、乱暴狼藉禁制の地とされてきた草道島（現大垣市）の西円寺に身を寄せます。禁制とはいえ西軍の陣は目前であり、一行は関ヶ原に向け身代わりを立てます。西円寺住職細川賢秀は上人の身代わりを演じ、関ヶ原付近で石田勢の襲撃を受け討たれたと伝えられています。一方、上人は関ヶ原を裏から抜けるべく池田郡片山の善性寺から、石田方の探索を逃げるように春日谷、国見峠を越え、近江国に入り、大津で八月十七日に徳川秀忠に謁見しています。関ヶ原の合戦が九月十五日。その前哨戦となつた米野、竹鼻城の戦いは八月二十二日のことです。上人の関東下向、そして京への帰洛が一体どんな意図で行われ、歴史にどのような影響を与えたかは分かりません。しかし、戦乱の世に門徒が信仰に身を焦がし動いた、その息遣いは感じることができるように思います。

五年後の秋、上人から森部村など十五ヶ村の門徒に「土手組」の名称と本山直参の待遇、そしてご本尊と上人の寿像（生前に送られる絵像）が送られました。以来四百年を経た現在も、上ヶ寺、下ヶ寺で交互に、毎月十日の「十日講」、年一回の「報徳会」の法要が営まれています。